

第 405 回(580) <読書会>例会資料

みすず書房ロマン・ロラン全集第4巻 片山敏彦 訳

『ジャン・クリストフIV』 「九 燃え立つ茂み」

2024年4月27日(土)午後2時～4時

発表 中田 裕子

朗読 松田 有美子・中田 裕子

【88頁～106頁】

彼らはパリから出た。

パリを去ることは彼にはそんなにつらくもなかった。友オリヴェがいっしょなら、どこに居ようとかまいはしない。明日、彼に再び会うことをクリストフは当てにしている……

ラロッシュに着いた。二人はクリストフに別れるとき、つい思わず顔つきに愁嘆を出してしまった。クリストフは陽気に彼らと握手をして——「そんな葬式の時みたいな顔つきなどはしないでくれたまえ」と彼らに向かって叫んだ——「またきっと会えるよ！そんなことはどうさもなくてできるさ！オリヴェと僕とは明日君たちに手紙を書くだろう」列車は出発した。二人は遠ざかって行くクリストフを見送った。「かわいそうな男だ」とマヌースは言った。彼らは再び自動車に乗った。二人とも口をきかなかった。しばらくしてカネーが言った——「僕たちは一つの罪を作ってしまったと僕は思う」マヌースはすぐには答えなかったが、やがてこう言った——「どうせ、死者たちは死んでいるんだ。生きている人間どもを救うほかはないさ」

朗読1

朝だった。……なんにも興味を感じることができなかった。彼は廊下に聞こえる足音に気をとられていた。待つことのみで過ごした一日と、そして眠らなかった前夜との疲労のために彼のすべての感覚は過度に敏感になっていた。

朗読2

クリストフは意識を回復すると激怒の発作におそわれた。彼はマヌースを殺したかった。駅へかけつけた。——「マヌースを殺すのだ！殺すのだ1」という固定観念にとり憑かれていた。パリ行の汽車に、手当たりしだいに乗り込んだ。フランスの国境を過ぎて二つ目の駅で列車が突然、先へ進まなかった。パリ着があまり遅くなるほかはなかった。

オリヴィエのためにはもうどうしても間に合わない。マヌースに会うこともできそうにない。それ以前につかまってしまうだろう。どうするか？何を意欲するか？このままずっとパリへ行くか？引き返すか？彼は通りがかりの憲兵自分を引き渡そうかと考えた。生きようとする漠然とした本能が彼を押しとどめて、スイスへ彼を戻すように助言した。

夜明けがたに、国境からずいぶん離れたフランスの村に来ていた。一軒の農家に辿りついて、一片のパンと、寝床代わりの藁の一束を乞い求めた。農夫はクリストフに一步近寄ってクリストフの目の前に1枚の新聞を差し出した。第一面に彼の写真がでていた。「私を引き渡しなさい」男は彼について来いと合図をした。一つの十字架標のところまで来着くと農夫は、それから先の道を教えて彼に言った。「国境へはその道で行けるのです。」彼は国境を越えた。この瞬間にふと思いついたのは、この町に同郷出身の知人である医者のエーリッヒ・ブラウンが住んでいることだった。クリストフは、傷ついている動物の本能のようなものにうながされて、全く赤の他人ではない人の家に転がり込むために絶対絶命の努力を尽くした。

とうとう彼は、一つの家の戸口に、探していた名を読んだ。彼はノックした。

「ひと晩だけ！……二十日でも五十日でも、あなたのお好きなだけですよ。あなたがこの土地においでになる間は必ずあなたは私どものところに泊まっていてくださらなければ。そして私としては永いご滞在がのぞましい。それは私どもにとって名誉でもあるし、幸福でもあるんです」こんな愛情のこもった言葉にクリストフは何とも言えず心を打たれて、ブラウンの腕の中に身を投げ込んだ。クリストフはこの家の主人の腕に抱かれたままぐったりとなった。頭を枕の上に乗せるとすぐに眠り込んだ。ブラウンとその妻とが彼を看護した。

朗読3

朗読4

翌日の朝はずっとおちついて居た。重い眠りがその虚無によってクリストフを再びつつんでいた。厭わしい生活のなごりは、その中で消えた。……—しかしそれだけに、再び目覚めると一層息苦しい気持ちだった。

朗読5

打ち砕かれている彼は、人々に自分のことを忘れさせようとした。彼が愛したすべての人々が、彼にとってはもはや存在しないのと同然だった。彼にとっては存在している人間はただ一人しかなく、そしてその人はもう生きていないのであった。彼はその人を心の中

に再生させることに一生けん命だった。彼はその人と対話をし、その人への手紙を書いた。だが、彼がどんなに努力しても、彼は夜の夢のなかでその人に再会することはできなかった。

下界の生命は、この魂の墓の中へ、少しずつしみ込んできていた。クリストフは家の中のいろいろな物の音を、再び聞き取りはじめた。そして自分では気づかぬうちに、それに共鳴し始めた。クリストフは再び生活の中へ復帰しようところみた……作曲の仕事に取りかかることが大変な努力で、ひどく嫌な気がした。音楽の仕事が彼には出来なくなった。芸術への判断も——ただ不幸を通じてのみ本当にできる。不幸が試金石である。——世の中の立派そうなものが、悲哀の指で叩かれて吟味されるとき何とうつろに響くことか！

朗読6

このとき以後クリストフの生き方は再び立て直された。彼は偶発的な興奮状態に引きずられることはもうなくなった。悲しみに沈むことはやはりあったが、しかしそれは或る正常な悲しみであり、それは彼が生きることの妨げにはならなかった。

同じいろいろな身ぶりや同じことば、同じ経験の回帰を彼はひっきりなしに見出すのだった。生きるためにはそれを考えないことが必要だったし、また彼は生きようと思っていたのだから、クリストフはそれを考えまいとした。

朗読7

クリストフは再び生き始めた。彼の足どりは以前の確かさを取りもどしたように見えた。悲しみにたいして心の扉は再びとだされた。悲しみについては誰にも言わず、また自分も悲しみとだけとともに居るのを避けた。彼の様子はおちついていた。

「ほんとうの苦悩というものは」バルザックは言っている——「それが自分で掘って作った深い川床の中にじっと落ちついているように見え、眠り込んでいるように見えながら、そこで依然として魂を侵食しつづけている。」

行ったり来たり、音楽を弾いたり、笑いさえしており——（今では彼は笑うのだった！）——生命の熱を放っている眼を持つ逞しい人間クリストフの生命の最も奥深いところに、何かが砕けているということ、果たして誰が知り、観察し、感じ取ることができたらう。